

佳作

あきらめなければぞきる

大阪府 大阪教育大学附属池田小学校五年 福田 健太

ぼくは小さい時から水遊びが大好きだった。お兄ちゃんや水鉄砲を打ち合ったり、川でザリガニをとるのが好きだった。だが、泳ぐのだけは得意になれなかった。ようち園の時から四年間もスイミングスクールに通ったが泳げるようにならなかった。そしてついにスイミングスクールをやめてしまった。

三年生の夏休み、学校で特別水泳指導があった。それは、うまく泳げない子や、泳げてもタイムがおそい子と呼ばれた。校長先生や他たくさんの先生がいて、生徒二人に先生一人がついてくれた。最終日、先生がかき氷を作ってくれたのがうれしかった。

四年生の夏休みもぼくはそれに呼ばれた。これは三、四年生しかないものだった。なぜなら、五年生の夏に臨海学舎があり、海で泳げるように指導してもらっているからだ。この年も先生に平泳ぎを教え

てもらい、ついにゆっくりだが二十五メートル泳げるようになった。そしてまた最終日にアイスクリームをもらった。うれしかったが来年はもうこの特別水泳に来られないのかと思うとさびしかった。そしてその時、ふと来年の臨海で遠泳を泳げるようになりたいと強く思った。

遠泳に行くには決まったタイムをクリアしなければならぬらしい。前の年に臨海に行ったが、天候不良で遠泳に行けなかったお兄ちゃんがそう言っていた。一分以上もかかっているぼくではその時は絶望的だった。しかしずっと泳げなかったぼくが、今年は二十五メートル泳げるようになったのだ。あとはタイムをちぢめるだけだ。臨海まであと一年ある。ぼくはお母さんに相談して、もう一度スイミングスクールに通わせてもらうことにした。

その年の十二月、スイミングスクールのテストでは四十五秒だった。夏に比べてずいぶん早くなったが、あと十五秒くらいちぢめなければならぬ。あと半年でいけるのか？

六月に測定したら三十七秒だった。ぼくは心の中では半分あきらめていた。しかしその後きせきがおきた。最終の測定で、基準タイムをきる三十秒一を

記録した。ぼくはその時耳をうたがった。ぼくは遠泳に行けるのだ。

臨海学舎の白浜から、おじいちゃんにはがきを出した。一週間後、家に返事のお手紙が届いた。おじいちゃんもぼくが泳げなかったことを知っていたので、泳げるようになったことをすごくよろこんでくれた。「何事も努力すれば出来るということを学びとったと思います。最後まであきらめずよくがんばった。本当にすごいね!」と書いてあった。

去年まで泳げなかったぼくが遠泳に参加できたのは、去年ぼくを泳げるようにしてくれた学校の先生方と、泳ぐ楽しさを教えてくれたお兄ちゃんのおかげだ。一つの目標に向かって一年間もがんばったのは初めてのことだ。今回、努力をすれば努力した分だけ、できるようになるということを学んだ。